

平成 21 年 6 月 11日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18402034
 研究課題名（和文） 生活者・商人のライフヒストリーに見るジャカルタの変容に関する調査研究
 研究課題名（英文） Social Change in Jakarta seen through personal history of people, merchants and peddlers
 研究代表者
 倉沢 愛子（KURASAWA AIKO）
 慶應義塾大学・経済学部・教授
 研究者番号：00203274

研究成果の概要：

3年間に亘りジャカルタ市南郊の低所得者の集住地区であるレンテンアゲン町において、露天商・行人たち、ならびに同地区内にある伝統的市場で商いをする商人たち（商店主並びに行商人）からその個人史（パーソナルヒストリー）の聞き取りを行なった。また、北部の中国系住民が多く住む商業地区コタにおいて、中国系の商人たちからも同様なききとりを行なった。それを通じて、開発政策の中で烈しく変容する庶民の生活を描き出し、それが大きな歴史をどのように投影しているのかを考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	5,000,000	1,500,000	6,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ジャカルタ、ライフヒストリー、社会変容

1. 研究開始当初の背景

研究代表者倉沢も、研究分担者内藤も、すでに1990年代から、開発政策によって変容する大都市ジャカルタの庶民の生活の様々な位相を調査してきた。本研究はその一貫として位置付ける事ができるもので、とりわけ商人たちの生活を彼らの語りを通じて歴史的に考察しようと考えた。

2. 研究の目的

個々人の生活体験や活動の時間軸の中に、

全体の歴史がどう投影されているのか、そして又個々人の生活の集積が大都市の変容にどう関わってきているかを、インドネシアの商人たちの日常を記録する事を通じて描き出す事を目差した。

とりわけ32年間にわたるおおがかりな開発政策の導入によって首都がどのように変わっていったか、その過程で、ここに住み、商いをする商人たちはどのような人生の変遷を体験したのかを描く事によりジャカルタの社会史の一断面を描き出す事ができると考えた。

3. 研究の方法

最初文献により、ジャカルタ市の形成過程、都市開発、人口流入などに関する全般的な情報収集に努めたのち、実際現地に赴き、フィールド調査、具体的には個々人との長時間にわたるインタビューを行った。

本研究は幾つかの異なるサブ・テーマをとりあげ、その各々に関して現地調査を行った。

もっとも集中的に調査を行なったのは、ジャカルタ市の南郊に位置するレンテンアグン町である。ここは都市再開発にともなってジャカルタ市中心部の居住集落が取り壊しになったのち、多くの住民が流入してきた一方、農村から多くの人々が職を求めて流入し、ここ三〇年ほどの間に人口が急激に増大した地域である。

倉沢は、このレンテンアグン町内の一つの地区(具体的には一つの隣組)を取り上げて、まず、コミュニティの視点からここに住む商人(とりわけ露天商や行商人)たちの生態と、おなじ地区に居住する顧客あるいは消費者たちの属性、およびその相互関係を描こうとした。

一方内藤は、この町内に位置する伝統的市場で、その商人(常設店店主と露天商のほぼ全員)ならびに買い物客の双方から詳細な聞き取りを行った。商人に関してはその属性の分析を常設店店主と露天商の両グループに分けて比較した。

さらに内藤は、ジャカルタ市北部のコタ地区に住む商人たち(主として常設店店主)に対する詳細なインタビューを行った。

倉沢はレンテンアグン町でのコミュニティ内部での人間関係を中心とした調査のほか、さらに少し視点を拡大して国境を越えて隣国マレーシアで商いをするジャカルタの商人たちからの聞き取りを、マレーシアで行った。具体的にはマレーシア北部のイスラム色の強いケダ州で、インドネシア人が、出稼ぎや商売に行っている先をおとずれ、約一週間にわたって、彼らの国を出た動機、新しいコミュニティでの生活の困難さ、故郷とのつながりなどに関して聞き取り調査を行なった。

4. 研究成果

5つのサブ・テーマごとにまとめると以下のようなものである。

(1) 調査地のコミュニティ調査

レンテンアグンの隣組を単位として実施したコミュニティ調査では、質問票を使って

全世帯(証人並びに一般住民系127世帯)に対し彼らの家族構成、年齢、職業、学歴、出身地、ジャカルタでの居住年数、この隣組での居住年数などを問うたのち、住民50名を選んで、彼らの詳細なライフヒストリーを聞き取り、この居住地の起源や歴史の理解に務めた。

特に同地区のコミュニティへの流入者について「移動」の観点からアプローチし、大規模な開発政策開始(1960年代末)以前からこの地域に住み着いていた「地の人」と「外来者」の力関係のバランスが時の推移とともにどのように変化していったかを見るとともに、それぞれのグループが経済力、学歴、職種などにおいてどのような特徴を見せているかを分析した。この観点からの成果の一部は倉沢愛子編『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』(明石書店 2007年)のなかで、「外来者の流入と年下層社会の変容 ジャカルタ南郊の集住地区の事例」と題して発表した。

(2) 露天商・行商人の調査

この地域の住民は相対的に低所得者が多く、住民の約30パーセントがいわゆるインフォーマルセクターでの雑業従事者である。大部分は、地方から単身で出稼ぎにきている男性であるが、一部、世帯を持ち夫婦で働いている者もいる。

インフォーマルセクターで働く者のうち、もっとも多いのが露天商ならびに行商人である。一方、「商人」と言う範疇で見れば、ここには通常のイメージで考えられるような常設店はない。自宅の軒先の一部で生活必需品を販売する「ワルン・クロントン」とよばれる小規模の「よろずや屋」がしいていえば「常設」であるが、これはその営業規模から言ってもインフォーマルセクターの商いに近い。そこで調査においてはこの「ワルン・クロントン」の所有者も含めて調査の対象とし、一定の調査票を使用してほぼ全員に面接し彼らの仕事に関する聞き取りを行った。

これらの露天商や行商人はインドネシア語でそれぞれ「カキリマ」ならびに「プダガン・クリリング」とよばれる人々である。この種の仕事は何も資本を持たずに田舎から出てきてすぐにでも開始できる手軽な職業の一つだと考えられている。行商の場合もっとも大きな資本は商品を運ぶ天秤棒や台車であるが、これはレンタルすることができるので、そのレンタル料と最初一日の商品仕入れのための資本金さえあれば誰でも手軽に始める事がで

きる仕事である。

インフォーマルセクターで働く行商人の中では、野菜・魚などの毎日の食材や、あるいは自宅で調理した食べもの（揚げ物などの軽食、麺類、菓子類など）を販売する者がもっとも多い。そこでインフォーマルセクター全員を対象として行った調査票による調査に続く第二段階としては、この種の行商人に重点を当てて全員に詳細なインタビューを行いそのライフヒストリーを書き取った。

インタビューののち、インフォーマントのなかからさらに何名かを選び、数日間にわたって彼らの日々の活動に同行させてもらい、材料の仕入れ、仕込み、販売等のプロセスなどその商活動の全貌を観察させてもらった。そして彼らの仕入れルート、販売ルート、日々の収入規模、顧客層などを自らの目で確認した。

彼等は、同業者の間で営業場所についてなんとなく住み分けを行っており、ほぼ連日同じようなコースで歩いている。しかし、一日中歩き回っているわけではなく、何ヶ所かに止まってかなりまとまった時間腰をおろし販売している。従って常連客も多い。とりわけ、学校の校門の前は彼らにとって格好の稼ぎ場である。インドネシアでは小学校でも中学校でも給食はなく、休み時間になると、学校の周辺に集まって来て営業するスナック菓子屋さんからおやつを買うのが習慣になっているのである。

それではこれらの調査からどのような事が分かったであろうか？行商人はその多くが地方からの出稼ぎであり、これまで一般に彼等は社会の最下層に位置付けられてきた。すなわち行商という仕事は、一般的に失業したとか地方から出てきた場合であるとか他に収入手段が無い人たちが、しかたなく従事する最下層の職業であって収入も少なく、何か他に良い仕事があれば転職する事を前提とした、一時的な性格のものであると考えられてきた。

しかし今回のこの観察から得られた一つの結論は、彼等は、かならずしもこの仕事を否定的にみておらず、むしろ、努力いかんによってはかなりの収入にありつける場合もあること、たとえ小規模であっても自営であるため自由に創意工夫できること、営業時間などもその日の体調や気分によって自分で調節できることなどから、むしろ好んでこの仕事についている者が多かったということである。不安定な仕事ではあるが、安定性よりも、「自由」に重きをおこうとする傾向がみられるということであった。

ところで、この調査を実施中露天商や行商人達の存在が脅かされるような事態が発生した。ジャカルタ市は、行商の存在が交通渋滞を悪化させているとして、都市整備のために、市街地区における行商活動を禁止し、行商人からのみならず、彼らからものを買った消費者にも罰金を課すというような条例の制定を議会で協議し始めたのである。これまでも官憲による露天商や行商の強制的一掃はしばしば行われてきた。しかし今回は、彼らからものを買った者たちにも罰金を科すという強硬な手段を講じようというのであった。

交通事情の悪いジャカルタでは、住民たちにとっては、食材、日用品、スナックなど日常生活に必要なほぼすべてのものを行商人から安い価格で入手することによって日々の生活が成り立っている。特に低所得者の住む集住地区においては非常に大きな受容があるのである。従って消費者にとってもこの行商人の存在は不可欠であり、このような条例が実施に移されれば大混乱や生活パターンの大きな変化を呼び越すことは必須であろう。現に消費者からも大反対が起こり、結局今日に至るまでこの条例は成立していない。

(3) 伝統的市場の調査

さて、内藤も同じくレンテンアグン町内にある伝統的市場でその商人(常設店主並びに露天商)顧客の双方に対して聞き取り調査をした。この市場は直接消費者に対する販売、すなわち小売りが主体であるが、しかし同時に露天商や行商人達はその食材の仕入れを行う場所でもある。また、市場の空間で商いを行うのは、常設店主のみならず、露天商も数多く見られる。露天商も含めた商人ならびに顧客の双方とのインタビューを通じて内藤は、以下のような結論に達した。

第一にそれは市井の生活を支える空間である。地域から集まる買い物客の動向は勿論のこと、路地裏での再販売のための仕入れが行われていることから、ジャカルタのインフォーマルセクターに繋がっていく空間といえる。

第二に、それは多様性に満ちた空間である。商人もそして一部商品すら遠隔の地に出自がある。ことにエスニックな多様性は、商取引がいかに断片的で商人たちが組織化されないものであろうとも、この空間を猥雑ながらも共存共栄の場所に変えている。

第三にこの多様性は、単に多様だけではなく、階層性を持っている。商いの形態(常設か露天かなど)はもちろんのこと、扱う商品によっても大きく異なっている。

第四に、この階層性が連続している。常設店と露天商の境界さえ不明瞭であるあいまいな区分が共存共栄のシステムを強化しているのかもしれない。

このような結論を含め、パサル研究の成果は、倉沢愛子編『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』(明石書店 2007年)のなかで「変容のなかのパサル ジャカルタ南郊L市場から」と題して発表した。

(4)本研究の第四のサブ・テーマは、コタ地区に置ける商人の研究である。コタ地区はオランダ植民地時代のバタヴィア市に端を発するもので、歴史は十七世紀に遡る。オランダ式の街づくりがなされ、アムステルダムを想起させる古い石造りの建物や運河が続く地域である。

かつてはオランダ人が牛耳る商業・金融の街であったが、独立後彼らが引き揚げてからは、主として中国系のビジネスマンや商人たちの活動の場となっている。いまでもジャカルタ最大の商業地区であり、一般に華人が意図して理解されている。

聞き取り対象者の大半は50歳代であり、1965年の9・30事件(初代スカルノ大統領が倒れるきっかけとなったクーデター。これ以後インドネシアでは反共政策がとられ、中華人民共和国との関係で華人に対する圧力も強まった)当時の記憶から聞き取る事ができた。また1998年のスハルト政権崩壊前夜の暴動や、2005年の華人街(パンチョラン通り)露天商一掃事件など、コタの街の景観が大きく変わる事件に対する、個々の商人の体験や評価についても聞き取った。

コタの商人たちは、先祖代々の居住者が長期にわたって商業を牛耳っていると考えられていたが、実際には、人の入れ替わりが烈しく、ジャワ島以外からの新参者の流入も多く流動性が大きい事が判明した。特に西カリマンタンのシンカワン地区からの流入者が多いことに気づいた。

この研究は開始次期が遅かった事もあり、まだ研究成果としては何も刊行していない。

(5)マレーシアへの出稼ぎ

五番目のサブテーマは、隣国マレーシアへの出稼ぎである。マレーシアは、国民の多くがインドネシアと同じ言語、宗教、類似した慣習を持つ人々であるが、一人あたり国民所得はインドネシアよりもはるかに高く、給与体系も良いため、非常に多くのインドネシア人が合法的にも非合法的にも出稼ぎに行っている。調査地レンテンアグンからも何名かが

働きに出ている。

それと同時に、インドネシアの商人たちが、商品をたずさえて国境を越え販売に歩いている。とりわけ、女性のイスラム服やヴェールなど、幾つかの生活物資は明らかにインドネシアから数多く流入している。

たまたま国境を越えて飽きないに従事するジャカルタの商人たちの幾つかのケースを耳にしたため、そのパーソナルヒストリーをたどるべく彼らを追って調査に赴いた。この調査は一週間足らずの予備的な性格のものであったが、実はあまり成果をあげることができなかった。これらの国境を越える商人たちの絶対数は非常に少なく、何名かの個人史を聞き取る事はできたものの、それが大きな歴史の流れや社会の変容にどう投影されるのかというような問題点へつなげることが難しかった。さらに彼等は余り定着性がなく、長期定住へは繋がらないため、地域社会へのインパクトや相互作用は殆どみられず、社会的な観点からの分析としても余り関心を引かなかった。そのためその後の継続的な調査は断念した。

(6)まとめ

以上のようにいくつかの異なるサブ・テーマに分けて研究を行ったが、この三年間はフィールドにおいてデータや語りの記録を集める事に集中してしまった。データの整理もみかんの部分があり、そのため、まだまとまった成果が刊行されていない。今後これらを総合して有機的につなげ、商人たちの個々人の生き様が大きな歴史の動きの中でどう投影されていくのか、彼らの生活体験や活動の時間軸の中に、全体の歴史がどう投影されているのか、という観点からまとめ、文章化する作業をする必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

内藤耕「インドネシアにおける日系工業団地と周辺農村との関係」『東海大学紀要文学部』2008年 pp. 87-102 査読あり

倉沢愛子「ジャカルタの路地裏(カンボン)世界」『アジア遊学:ジャカルタのいまを読む』90号 2006年 pp31-41 査読なし

倉沢愛子「国家とコミュニティの狭間で

揺れ動くジャカルタの RT/RW 婦人会
(PKK) 会合の分析を通じて」『ヘスティア
とクリオ』3号 2006年 pp.31-51 査読あ
り

内藤耕 「熱気と混沌のパサール」『アジア
遊学：ジャカルタのいまを読む』90号 2006
年 pp.54-66 査読なし

〔学会発表〕(計1件)

内藤耕 「東南アジアにおけるメディア、国
家、市場——インドネシアのテレビ放送界の
20年を例に」アジア政経学会東日本大会
2007年5月26日 学習院大学

〔図書〕(計4件)

倉沢愛子、内藤耕 『変わるバリ・変わらな
いバリ』(倉沢愛子・吉原直樹編) 勉誠出版
pp.12-35, pp.69-88 pp. 205-223 2009年

倉沢愛子 『大量虐殺の社会史：戦慄の20
世紀』ミネルヴァ書房 pp.149-179 2007年

倉沢愛子 鈴木正崇編 『東アジアの近代と
日本』慶應義塾大学出版会 pp.333-264
2007年

倉沢愛子、内藤耕 倉沢愛子編 『都市下層
の生活構造と移動ネットワーク』明石書店
2007年 pp.15-99 pp.101-169

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉沢 愛子 (KURASAWA AIKO)
慶應義塾大学・経済学部・教授
研究者番号：00203274

(2) 研究分担者

内藤 耕 (NAITOU TAGAYASU)
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：30269633

(3) 連携研究者